



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	源氏物語の成立に関する試論：紫と紫のゆかりの物語
Author(s)	風巻, 景次郎
Citation	北海道大學文學部紀要, 4, 107-129
Issue Date	1955
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33229
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_P107-129.pdf



源氏物語の成立に關する試論

——紫と紫のゆかりの物語——

風
卷
景
次
郎

源氏物語の成立に關する試論

——紫と紫のゆかりの物語——

風 卷 景 次 郎

は し が き

これはそれ自体として一応独立した文章にまとめたいと努力したけれども、全体としては「源氏物語の成立に關する試論」の題名で發表した三回にわたる文章に次いで、その第四回目に當る部分を占めることとなる。その第一回は「文学」の昭和二十五年十二月号・昭和二十六年一月号（第十八卷第十二号・第十九卷第一号）に二回にわたつて連載され、その第二回は京大國語国文学研究室の「國語國文」昭和二十六年五月号（第二十卷第四号）に載せられ、その第三回はまた「文学」の昭和二十七年四月五月号（第二十卷第四号第五号）に二回にわたつて連載されている。今回はその後につづく第四回目に當るわけである。

源氏物語に關する研究は、万葉集や芭蕉などのそれと並んで、古典研究の中では相當の研究結果を蓄積した部類に屬すると思われるが、それだけに本文批評や校本作成や註釋研究から文学史的研究や作品批評まで可成りの方面にわたつていて、そうした分野から見れば、成立論は極めて小さい分野を占めるに過ぎないものである。そしてここに取りあげられた問題は、まさにその題名のしめす通り専ら成立に關する試論であつ

て、最初の發表以來きわめて間口はせまくしぼられている。しかしそれは唯單に問題を狭くすることだけを意圖したわけではないのであつて、むしろ源氏物語にとつて、残された大切な問題をはつきりさせたいというのが主たる動機であつた。

この主題については、第一回の雑誌發表に先だつて、昭和二十五年十一月に、東京大学の山上御殿でその一部を發表した時、問題提起の仕方、したがつてその題名も「源氏物語の創作過程に關する試論」と訂正されるべきであらうという批判的意見が出た。それはただ題名を改めるというだけにはとどまらず、寧ろ研究の對象がとり変えられねばならぬという意圖をも含んだ發言であると受けとれるものであつた。その意味は、推測する所によれば次のようなものであつた。作品が成立するということは創作されるということではなくて、作品が成立するということとは創作と呼びならわしている以上は、創作するという以外には文芸作品を結果する活動というものも考えられぬからである。さらに創作という時には作品をつくり出す作家のはたらかしというものが計算に入つていて、創作活動の主体が常に作家という形で意識されていなければならぬ。創作する主体をぬきにした創作活動というものは考えられぬからである。それ故作品が成立するということは創作主体たる作家があり、その創作活動の結果としてはじめてあり得ることであつて、成立過程ということとは創作過程ということに外ならぬという点をはつきりさせる事が何より大切である。創作過程を研究するという立て前にたてば、当然それで作家の創作活動の追跡という仕事を、外面的にとどまらず、内面的にもなし遂げねばならず、そうする事によつてのみ、創作主体を抜きにすることなしに作品の成立過程は全面的に捕えられるであらう。はじめから成立過程などという言い方をすれば、外面的な追跡だけに終つて、作家主体の内面的な創作の祕密に触れることもできず、また触れ得なくても事足れりとする安易な立場にとどまる危険が大きいであらう。

う。それ故当然「源氏物語の創作過程に関する試論」というべきである。大体の意見はそのような事であつたろうと思われる。

しかしこの意見には直ちに従うことは出来なかつたし、今でも出来ない。なぜならば、創作過程の研究として作品論をする事から、私の立場を解放することこそ、私の一番もとめていた点であつたからである。と言ふわけは、創作過程の研究でなければならぬという意見が発するために、ある一つの重要な予見が前提されているように思われるのである。それは今日見られる所の源氏物語が一応原作の形を伝えているものであり、そして近代文学の創作などから類推できるような条件のもとに創作されたであらうという予見に外ならない。しかし私は、その点では、それ程現在の源氏物語の形態に信頼を持つことはできないし、また現在見得る源氏物語は單純に紫式部という一作家の純粹で自主的な創作活動の結果であると言えるか何うか、その点でも信頼をもつことができないと思つていたのである。もし現在の源氏物語に信頼を持つとするならば、源氏物語は頗るはげしい内部矛盾を持つてゐる作品と感じなければならぬし、もしそれにも拘らず、これが一作家の主體的な創作活動の結果のまま、つまり原型のままであるとするならば、これを創作した作者は社会的にも心理的にも常態ではないのではないかと感じられて来る程にその作品の内部的な不自然さ、したがつて作家の精神の異常さは所々に顔を出してゐると言わなければならないからである。勿論作者は唯一であつて、しかも常態の心理の所有者ではなかつたことが証明されてゐるならば問題は一つだけ減じたことになるのだが、それすら何もはつきりしてはいないのである。結局源氏物語の創作過程に関する追跡を試みるには、まだ余りにも準備はできていない状態にあると言わなければならない。準備的にはつきりしていなければならないことは、まず第一に源氏物語の現在形はどのようにして成立したものであるか、ということであつて、研究の結果、その成立の事情はすべて一作家の創作過程

として扱ひうる事が決定するならば、それはそれで誠に明快に問題の一つが解明されたことであり單純化されたことであらう。しかしそれでもなお、それを一作家の創作過程と決してよいかどうか、それは今ではまだはつきりしない問題であると言わなければならない。段階は、別の言葉で言えばまだ成立過程に関する研究の領域にとどまつてゐるということになるであらう。この際成立という語は、たとえば叙事詩の民族的成立などと言ふのとひとしく、純粹に一作家の創作活動によつて直接に作品の形が決着したのでない、すべての場合を含み得るものとして使うのである。

そのようなわけで、最初講演による研究発表の際早くも意見が出たに拘らず、第一回の雑誌発表この方引きつづき「源氏物語の成立過程に関する試論」の題を改めず、また研究の対象をもずれさせないように努めたいと思つてきたのである。したがつてこの一とつながらの研究は遅々として何時終るとも予見できないが、その立場は可及的に実証的であつて、その目的は、理想的にも成功しえた場合には、源氏物語の文学批評、文学史叙述に対し、実態の正確に掘り起された資料を提供し得ることへの寄与である。それで今回もまた、成立過程に関する試論の第四分節としてこの小文を提出したい。

一

はじめに一言したいことは、源氏物語の成立論に寄与してきた二つの流れが、特に戦後の学界でやゝ対立的な論争になりかけていたということに就いてである。

その第一派は、源氏物語は桐壺の巻から夢の浮橋の巻まで、——巻名だけあつて本文の存しない雲隱の巻も含めて——五十四巻が、大体現在の排列の順序のままに、順を追つて創作されていつたであらうと見る見

方である。⁽¹⁾この見方には中世以来の強い伝統の背景があつて、今日にあつても非常に強力な見方である。⁽²⁾

それに対して第二派は、しかし巻々の創作が必ずしも現在形の順序通りではなかつたろうとする考え方に立つのであつて、これには時々作者を複数として考える考え方が附随したり、または創作外的な活動、つまり編集とか巻の廃棄とか加筆とかが現在形を成立させるのに大きな力を持つたのではないかという考え方が加つて来たりする。この第二の立場は——そして私の数少ない仕事もまたこれに属すると見られてゐるが——恐らくまだ三十年にしかならない若い立場であつて、ことにしかるべき業績の見られるようになったのは、ようやく昭和十年以後のことに属してゐる。⁽³⁾しかし昭和二十年代に於ける源氏研究はこの第二の立場に於ける盛な発言によつて活気あるものとなつたことも忘れることは出来ないであらう。

この二つの立場は事実、第二次大戦後の源氏物語研究の上で、互いにその立場をはつきりさせ合いながら、成立に関する論争を時の問題化させたが、第一の立場にはまだ信念的な感じがとれ切れず、第二の立場も新説の主張に大わらわな感じが着きまとつていて、真に科学的な冷静で厳密な状況がととのわないうまに、昭和二十九年度には入ると、幾分興味の圈外に落ちついたように見受けられた。それにも拘らず、問題はまだ究明の途中をたどしく辿りつづけてゐるに過ぎないのであつて、真に学問的成果のあがるのはこれからすることに属してゐるであらう。

さてこの第二の立場の最初の発言者、少くとも国文学の研究者に意識してうけとめられた最初の発言者は和辻哲郎博士であつたと思う。大正十一年に發表されたその印象的な「源氏物語について」⁽⁴⁾は、その当時まだ若かつた研究家の心に問題の在りかを深く刻み込んだけれども、かれ等の内部に於ても自發的に問題が成熟してくるにはそれから約十年の時日を必要としたようである。そして、その間、和辻説は都合のよい部分

だけ都合のよい方向に解釋して極めて表面的に盛に利用されたが、その代表的なものは源氏物語の短篇性の問題であつた。

和辻博士の立論の立場は現在の源氏物語を巻々の順序にしたがつて読んで行く場合、その相互の連続の不自然さが著しく意識されるという事実から出發する。それは読者の主観的印象だけにたよるならば、当然長篇としての企図の失敗に終つた作品であるという判定に到着せざるを得ないわけであるが、博士は露骨に性急にそのような断定は勿論下してゐられない。当時の博士は「日本古代文化」の完成後、「日本精神史研究」に収められた諸論文を發表される一方で、「原始基督教の文化史的意義」や「原始仏教の実践哲学」や、それから第二次大戦後はじめて著書となつた「ホメーロス批判」などの仕事に着手されはじめた頃かと思われるのであつて、西欧に於ける古典の本文批判の方法や、その一般的成果についてはすでに十分通じておられたに違ひないと思う。これは想像にすぎないのではあるけれども、その読みの結果に對する処理の仕方から、それは十分根拠のある想像だと思われるのである。博士は源氏物語を長篇として読むことに、現代人として大きな抵抗を感じながら、それをただちに駄作として評価せず、逆に、現形成立に関して何等かの問題が伏在するのでないかを想像し、それが証明される時に、或は複数の作者を考えなければならなくなるかも知れず、また現形源氏物語の巻々の順序にしたがつて創作されたのでなかつたことが証明されるかも知れぬことを想定された。その結果、現形源氏物語によつて源氏物語自体を評価することは慎重に避けながら、現形とはほぼ同じ形であることの證明されることは中世以降の長い期間にわたつて、古典としての生命を保ち得た理由を何処にもとめることができるかを探つて、そこに短篇として読むならば、一卷ずつは美事な傑作でありうるという、幾分逃げ路とも思える理窟がみつつけ出されて來たのである。それはたしかにやや苦しいけれども、長篇としては何としても展開が不自然であるに拘らず、全体としては否定

すべくもない芸術作品としての印象が残ることに對し、この微妙な性質を互視的に切り捨ててしまつたりせず、周到の注意といたわりとを以て當られたことであつて、當時としてその態度は実に嚴密であり鋭くもあつたと言わなければならぬ。しかし惜しいことに、當時の国文学の分野ではこの配慮は十分に理解されず、ただまことに良い思ひつきとして、この短篇性ということが源氏物語の本質的屬性でもあるかのように謳われることになつてしまつたのであつた。事實短篇性ということは、外形的特色として見てもよく分る点であつたからに外ならぬ。

今かりに発端に近い数巻をとつて見ると、桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀という順序に並んでいるが、その中で帚木・空蟬の二巻だけは長篇の中の一部として、自然に巻から巻へ読みつづけることが出来るけれども、その外の巻の読み方になると、長篇中の一部として読んで行くには、何うしても相互關係が粗であつて、巻々ごとに中心が移動するようであり、そのくせ思い切りわるく一貫した筋を運ぼうとする未練が十分感じられるようでもある。しかしどちらかと言えば一巻ずつ独立したものとして読んだ方が抵抗を感じないで読めるし、長篇の筋を追うつもりで読めば、たしかに種々な抵抗を感じさせられる。少くとも今日の長篇小説の觀念をもつて読めば、あまりにも作者は各巻相互の筋の展開ということにも、主要人物の影像や心理の展開を工夫することにも無頓着で、ただごく枝葉末節の事だけで相互の關係を保とうとしているかにすら感じられる。たとえば若紫と末摘花と紅葉賀との一部または全体が別々の観点からまとめられてゐるに拘らず、同じ時期に於て同じ源氏に關係のあることを示すのに、十月の朱雀院行幸の観楓御会という同一事件に一言ずつ触れるというやり方だけにたよつてゐるのであつて、特に若紫に登場する主人公源氏は全く末摘花に登場する源氏を予想すらできない人物であり、末摘花に登場する主人公源氏は若紫の主人公源氏を裏切るような源氏である。と言つて、それはドクター・ジキ

ルとミスター・ハイドとのような緊密な一個の人間に於ける二つの人格といつた關係でもない。極端に言えば両者は名は同一の源氏の君であつても、同じ時期に於ける同一の人間であるという何の必然性も關係もなにかに見えぬ。つまり一人の人間としての主体性が感じられないのである。こうした各巻のつながりは、妙な言い方ではあるが列車編成式でも言つたらばよいであらうか。一輛ごとに独立の貨車や客車を機械的にその一端で連絡して一列車を編成してゐるようなもので、つながりは機械的であり、命の通つた主題が一貫してゐないのである。空蟬の事件にしても夕顔の事件にしても末摘花の話にしても、それ等は別々の女性と源氏との關係であることになつてゐるが、別の男の女性關係であつてもかまわないばかりでなく、一巻を一つの短篇として巻々のつながりなどに氣をかけずに読めば、その方がたしかに印象は鮮明ですらある。しかし一貫して読みすすむとすると不思議に混乱を感じる点が、今の読者には出て来るのである。そこで源氏物語は長篇としては欠陥を無視することとはできないが、一巻ずつを短篇として読む時のみ十分の鑑賞に堪えるであらう、と言う見方に魅力を感じたとしても、少くも今の読者としての常識を捨てない限り、無理はないわけである。少くとも源氏物語になれてゐた国文学者の中に、面白い見方だとして共鳴が生じたことは寧ろ自然であつたと思う。

しかしすぐ氣がつくように、そういう見方をしてもしなくても、桐壺から繪合巻・松風巻あたりまでの十七、八巻にわたる筋のはこびのたどたどしさ、巻々のつながりのぎこちなさは少しも帳消しにはならないことは注意すべき点である。それから最も大切なことは、この短篇性という觀念を援用することによつて救われなければならぬ巻々は、源氏物語のすべての巻々ではないという点である。すべてではないどころか、何らかの意味に於て巻から巻への物語の展開と、これを読んでゆく際の読者側の心理の推移との歩調が合わなくなり、したがつて物語の構成の上に

不審をいだけせるような場合にぶつかるのは、桐壺から繪合・松風あたりまでの十七、八巻のことであつて、その辺から後の方になると、物語の展開は読者の心理を適度に誘導して、短篇性だの長篇性だのと言うような事を考える必要を感じさせなくなる。勿論全体として今日の作品の速度にくらべて、源氏物語の展開の速度は緩慢であり、筋は平板であるけれども、それはむしろ平安朝物語の積極的な特色というべきであつて、その特色の中に於いての物語の展開は美事なものに成っている。それに玉鬘巻以下の十巻などになると、巻と巻とは筋の上ばかりでなく、一卷の形態の点でも殆ど独立の短篇といった性質を失つてしまふばかりでなく、その十巻全体によつて表現の完了したことを感じさせるような統一を示しはじめるのである。第三十四巻若菜から第四十一巻雲隠までの八巻は源氏の四十から死ぬまでの部分で、ここでは各巻が割に独立した一篇としても読める形をもつており、たとえば夕霧巻などはことに美事なまとまりをもつていと思うが、しかしそれと共に、各巻を一貫する太い背骨を持つていゝることも感じられて、紛れもなく源氏の晩年を描いた大作としての性格を感じさせ、ことにその描写も風俗小説などと言うべきでなく、すでに先学の説も多くあるように、作者の思想らしい宿世観とでも言うべきものによつて統一されているので、一巻ごとが短篇としてのまとまりを持つと持つまいと、そういう点にたよつて鑑賞を合理化せうとするような努力は全く無用になつていゝると言つてよいであらう。この点は源氏の後日譚である第四十二巻匂宮巻以下の十三巻、ことに宇治十帳の名で知られる最後の十巻になると、いよいよはつきりして来るのであつて、一巻ごとの表現も美事である上に全体としても大長篇として成功してゐると評しうるのであらう。

こう見てくると、和辻博士の源氏物語に於ける短篇性という着想は、その全体の巻々の性質から帰結された事ではなくて、特にそのはじめの方の巻々の性質に重点を置いて引き出されたものでなかつたかという疑

を生じうる余地があるのである。

しかしただはじめの方の巻々といつただけでは範囲がはつきりしないので、我々の用いなれてゐる言い方をすれば、それは第一部と呼んでゐる部分に特に著しく見えてゐる事だと言つて置きたい。今源氏物語の区切り方は、勿論人によつて随分様々に考えられてゐるが、出来るだけ大きくまとめて眺めると、三部に分けることが自然であらう。その第一部は桐壺から藤裏葉までであつて、源氏が生れてから三十九歳の冬まで。その間に源氏は現世の榮華の限りをつくし、すべての官職を幼な友達の頭中将に譲り、自分は太上天皇に準ぜられて、來春は初老の四十を迎えようとしてゐるのである。第二部は若菜から五十を越して世を去つた雲隠まで。その間に源氏は四十賀を祝われるが、やがて五十を迎えようとする兄朱雀上皇から末娘の女三宮の身の上を托されて、心ならずも妻とするが、愛情の不足から女三宮を友人頭中将の長男柏木右衛門督との恋に奔らせ、源氏自身痛恨するが、柏木は心を勞して病死し、女三宮は尼となり、二人の間に出来た秘密の子は源氏の実子として育てる中、半世の伴侶であつた最愛の紫の上に先立たれ、落莫として彼もこの世を去るのである。第三部は源氏に暗い宿世を感じさせた秘密の子は、その友であり源氏の孫宮にあたる匂宮と次々に同じ女性を求めつつ、生活力の衰弱と希望の喪失に虚脱しながら、若さを朽ちさせてゆく物語。いわば薫の青春喪失の挽歌とでもいふべきか。この三部に分ける区切り方は与謝野晶子女史によつて始められたものであるが、單純で合理的なように思われるので、便宜上この方法が多く用ゐられるようになってゐるわけであり、私どももこの区切り方に従つてゐるのである。それによつて分けるならば、短篇性の問題は実は殆ど第一部だけに限られてゐる問題であることが分るのである。

古典研究家はその点にはすぐ気がついたので、源氏物語に於ける短篇性に対して、後の方に見られる特色にしたがつて長篇性ということが考

え出されるようになったのであつたが、そうした巻々の形態的分類をして見たにしても、それからは殆ど何物も導き出せなかつたのであつて、和辻博士の示唆多い発言は妙にねじれた源氏物語の巻々の外形的分類学に沈着してしまつたのである。しかし十数年を経て、若い世代の学者が成立論の開拓に進むようになって、源氏物語巻々の短篇性の問題は、実は根本に溯れば、巻々の現在の排列順序は創作順序に一致していない事に還元して考えることが出来る問題ではなからうかという事が取り上げられるようになり、そこで和辻博士によつて大正十一年になされた発言は、源氏物語の成立論に於ける新しい立場の発端に立つものである事が正當に位置付けられるようになって来たと思ふ事ができるのである。

成立論について、この第二の新しい立場に属すべき代表的なものは、昭和十年から二十年の間の十年間に、当時二人の新進学者阿部秋生氏と玉上琢彌氏によつて行われた。昭和二十年以後に展開した成立論は、緊密に両氏の戦前の業績を引き継いでいるといつてよいであらう。したがつて第一の立場に於ける学者の発言も多くは第二の立場の発言に対する批判を含んでいたと言えるであらう。戦後に於ける第二の立場の立役者は武田宗俊氏であり、池田龜鑑博士もこの線を掩護し同調する態度が明確であり、秋山虔氏もその立場にあつた。私の仕事も大体はこうした線に沿つて進んでいるものに外ならぬ。

さてこの第一の立場と第二の立場とのそれぞれの発言は、明らかに今のところ互に融和していない別箇の見方の上に展開しているのであつて、源氏物語自体の正確な知識への欲求と同等に、或はひよつとするとそれ以上に、銘々の立場を主張することに力が入っている傾きがないでもない。それで昭和二十九年のはじめには、「事態はまさに成立論をきつかけとして、源氏物語本質論にまで飛躍した。しかしこれらの発言が、研究者の歴史的主体性と表裏をなす關係にあつただけに、賛否何れかによつて、そのまゝ進歩派保守派に腑分けされかねまじき、やゝ大げ

さといえはゆゑしき情勢に立至つたのであつた。成立論プロバーについての検討が充分でないわりには(又事実としてこのことは、極度の専門的知識を必要とし、多くの人にとつてすこぶる困難なのであるが)、賛否の難言めいたものだけは多かつたという奇妙な現象は、実は問題がすでに各研究者に例外なく対決を追つてゐる主題論本質論として変貌してゐたからなのである。」と言ふような学界展望も發表されたが、事実二つの立場の研究者が一個の研究主体として立場的に方法的に主張をたゝかわすよりも、もつと資料自体の実證的な究明に重みをうんと掛けるべき所に実情はあつたので、論争は華やかに展開するよりも、寧ろ静まつてしまつた。多くは第二の立場に立つ人々が論争に誘ひ込まれなかつた為でもあつて、それは学界の期待に背いたかも知れず、事実、時の問題的興味からは一見自から身を退いたと見える点があるかも知れないが、今しばらくは、作品の表現自体の上に実證的な研究がおし進められるべき状況にあることが確實である。事実この新しい立場の研究者の間にはまだ共通の地盤ができたとは言ひえない幾多の問題が介在している。私もまた早く創作過程の問題に肉迫し、また主題論や本質論についても自分で介入し得る所まで進みたいと、強く望んでいる。しかしさし当つての場合は、実證的な立場に於て、源氏物語の実態に即してこまかく考證された資料を提供すること以上にはなかなか成り得ないであらう。

〔註〕

(一) 平安末に成つた藤原伊行の源氏釈は、本文は見るを得ず、註釈だけであり、現在見られぬ桜人という巻が一卷余分に附加されているが、その他はすべて同じである。次いで源氏釈と關係の深い藤原定家の源氏物語奥入も順序は同じである。その後の註釈並びに本文も、鎌倉時代の書写本であると信ぜられるものがすべて順序は同じである。従つて源氏物語の現在形が創作当時のものと信頼感強いのである。

(二) 終戦後、特にこの立場を強力に主張する代表としては、森岡常夫氏「源氏

物語の研究」(昭和二年十一月刊)・「源氏物語に於ける対立的契機」(東北大学文学研究室「文芸研究」第七集所載)・「源氏物語構成上の問題」(「文学」昭和二年七月号所載)・三宅清氏「輝く日の宮考」(京大國語国文学研究室「國語国文」昭和二年七月号所載)・「源氏物語の成立」(東大教養学部「人文科学紀要」第四輯所載)・岡一男博士「源氏物語の基礎的研究」(昭和二年一月刊)。

(3) 青柳(現在阿部)秋生氏「源氏物語執筆の順序」(「國語と国文学」昭和十四年八・九月号)は「若紫」が最初に書かれたと見て、現存源氏物語の形の順序のままに創作されて行つたものではないという着想を、よく整理された形で発表された最初のものである。同氏には「源氏物語研究の一問題」(「國語と国文学」昭和二年十月号)があつて、全巻を十一のグループに分け、創作意識の違いからくる物語全体としての筋や事件の性質の微妙な変化を跡着ける。結局作品のねらいは本居宣長の言うように「もののはれ」の一語でつくせるものではない事を指摘した論文である。次に玉上琢彌氏に「源語成立攷」(「國語国文」昭和一年四月号)・「昔物語の構成」(「國語国文」昭和一年六月・八・九月号)などがあり、敗戦後、京大文学部国文学研究室編の「源氏物語構想論」に収載されている。その中でも「源語成立攷」に於て発掘された源語関係の諸々のデータは、阿部氏の前記論文とともに、戦後の成立論に緒を与えたものが多かった。但し同氏は「源氏物語の構成」(「文学」昭和二年六月号)以来、やや成立論争からは身を避けられ、さらに深く現型の源氏物語を讀むことの必要を感じてゐるとして居られる。同じ頃のいくつかの報告には触れない。しかし阿氏は昭和十年代成立論の立役者であり、今も源氏学者としていよいよ発展されつつある事は学界公知の事である。

(4) その代表者は武田宗俊氏であり、その第一声は「源氏物語の最初の形態」(「文学」昭和二年六月・七月号)であつた。それは阿部秋生氏「源氏物語執筆の順序」の整理を今一段追いつめた所に立脚している。筆者の「源氏物語の成立に関する試論」(「文学」昭和二年一月・二月・昭和二年六月・七月号)は阿部・玉上阿氏や武田氏の後に続いた発表であつた。武田氏はその批判をも含めて「源氏物語最初の形態再論」(「文学」昭和二年一月号)を書かれた。この外

に「源氏物語の本旨」(「文学」昭和二年十一月号)は、阿部氏の「源氏物語研究の一問題」と直接の関係はないようであるが、全体を三つの群に分けて、それぞれ異つた精神基盤に立つとされる点で、理解の方法は同一型に属している。右の二つの論に対して、森岡常夫氏は「源氏物語構成上の問題」(「文学」昭和二年七月号)で全面的批判に出ている。武田氏のこれらの論文は「源氏物語の研究」(昭和二年六月岩波刊)にすべて収載されている。

(5) 和辻哲郎博士「源氏物語について」(「思想」大正十一年十一月号)は後に「日本精神史研究」(大正一五年十月岩波刊)に収載されている。

(6) 玉上琢彌氏の「源氏物語の構成」(「文学」昭和二年六月号)の、現在の源氏をそのまま直に読む態度をとつてみたいという意見の裏には、この和辻博士に共通の配慮が今数等注意深くめがらされているようである。氏は「源語成立攷」以来の手がかりは捨てずに、「正伝なき外伝」を、平安朝の人々が何う受け取つたかという問題を出し直しておられる。これは、何人かの作者の問題にも出入し、書かれない部分の領解という問題にも通じ、ひよつとすると東洋芸術の様式の問題にまで微妙な関係を持つてくるかも知れないが、根本には現代の説者が簡単に不合理と感じたり、不自然と感じたりしている表現上のいくつかの点が、何らかの秘密を持つていて、その時代に於ては自然でもあり必然でもあり得たろうと考えて、慎重に見て行こうとされる点で和辻氏以来の本文研究の態度をよく発展させていると言えよう。

(7) 三部の分け方は与謝野晶子女史の分け方に従つてゐる。

(8) 池田亀鑑博士「新講源氏物語」(昭和二年刊)又「源氏物語古系図の成立とその本文資料的価値」(「日本学士院紀要」九卷二号)

(9) 今井源衛氏「戦後に於ける源氏物語研究の動向」(「文学」昭和二年二月号)

(10) 阿部秋生・玉上琢彌・武田宗俊・秋山虔氏等の間の立場的な差、実証の根拠とした資料の差も相当開いていて、決してまだ共通の場を確保できたとは言えない。先輩である池田博士の立場もこれ等の諸氏の立場とは相違していると思う。

二

さて成立に関して問題となるようなところが全面的に存在するのは第一部である。その中でも主要な問題となつてゐるのは、源氏物語の本系の物語と平安時代以来並の巻とよばれてゐる物語とが結合してゐるということである。それともこれは、あとから本系と並とに区別されたのであるかも知れない。そうだとすると、そうした区別が少くとも藤原伊行の源氏釋でもすでに存していたことは、平安朝人と雖も、特に第一部の巻々については、何等かの質的区別を考えないではいられなかつたことの、何よりの證據となるであらう。巻々のつながりの悪さとか、したがつて長篇として読むには具合がわるいとか、個々の巻々を短篇として読む限りに於てのみその良さを感じ得るとか、というような事情が生じたのも、すべてこの本系の巻と並の巻との混在する所から生じてゐる。或は本系とか並の巻とか区別され得る巻々が混在してゐる所から生じてゐる。そのことが漸く問題として取り上げられるようになったのである。

並の巻といふことは、中世の源氏學に於ては非常にやかましい問題であつたが、近世江戸期国學者の源氏研究では、極めて軽く扱われた結果、明治大正時代の源氏物語評論や註釋には全然影を消してしまつたものであつた。その並の巻といふ觀念の存在したことを指摘し、その概念をはつきりさせたのは玉上氏の終戦前の業績であり、やゝ通俗ではあるが一応の解説をまとめたのは戦後の寺本直彦氏の仕事であつた。しかしその段階ではまだ具体的に源氏物語現形の成立に觸れる鍵として意識的に用いられる所までは来てゐなかつた。私の「源氏物語の成立に関する試論」はその第一回以来、すべて並の巻と本系との關係に考證の緒をもとめてゐる。それで本系の巻と並の巻とに分けた目録を次に掲げて置こう。普通に源氏物語は五十四巻と呼ばれるが、この目録のように数える

時は源氏物語三十七巻並十四巻というようになる。この数え方は中世の注釋書では普通のことであつて、物語評論の最初のものと思われる無名草子にも、この数え方が載せられてゐる。次にこれを掲げて置こう。

												(第一部)											
17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1							
玉	乙	槿	薄	松	繪	滯	明	須	花	賢	葵	花	紅	若	帶	桐							
散												葉											
蟹女						雲風合			標石磨里木			宴賀		紫		木壺							
並	並	並	並	並	並	並	並						並	並	並	並	並						
6	5	4	3	2	1	2	1						1	2	1	2	1						
野	篝	常	螢	胡	初	関	蓬						末	夕	空	夕	空						
												摘											
分火夏						蝶雪			屋生			花		顔蟬									
37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	(第三部)	26	25	24	23	22	21	20	(第二部)	19	18		
夢	手	蜻	浮	東	寄	早	総	椎	橋	匂	雲	幻	御	夕	横	柏	若	藤	裏	梅			
浮						生																	
橋習蛉舟屋木蔽角本姫						宮隱			法霧			笛木		菜		葉枝							
						並						並		(下)		(上)							
						2						1											
						竹						鈴											
						紅																	

この並の巻はこれまでの調査の結果では大体後來の巻と思われるので

あるが、特にそれが成立問題の重要な解明の鍵になると思われる第一部の中に於ては、明らかに後來の巻であると見てさしつかえない。この見方に有力な支柱となるものに武田宗俊氏の報告がある。氏の整理は戦前阿部氏の發表された源氏物語各巻の執筆の順序についての精密な整理と系統上おなじ線からふみ込んでいられるように思うが、阿部氏より確實に一步進んでいる点は、——第一部に属する問題であるが、——各巻に登場する人物特に女性の種類に従つて、巻の性質に二系統の存することを證明され、その一つを紫の上系、今一つを玉鬘系と呼ばれたことである。その中紫の上系の巻々には玉鬘系の巻々にはじめて登場する人物は出て来ないが、玉鬘系の巻々には紫の上系の人物が背景的存在として普通に登場してくる。それ故、紫の上系の巻々は玉鬘系の巻々を予想しないで作られているが、玉鬘系の巻々は紫の上系の巻々の存在を意識して作られていると解することが出来るわけである。これが武田氏の明快な整理の骨子である。この整理は全く各巻の内部的特徴から帰納されたものであつて、並の巻の事は全然計算に入れておられない。それにも拘らず純粹に内部徴證だけにたよつて行われた整理の結果が、殆ど完全に本系の巻々と並の巻々との區別に一致しているということは驚くべきことと言わなければならない。即ち、本系の巻は殆ど完全に武田氏の紫の上系の巻に一致するのであり、並の巻は同じく殆ど完全に玉鬘系の巻に一致するのである。この玉鬘系は数多くの内部徴象によつて紫の上系を前提した作品であることが分るのであるから、その玉鬘系と殆ど一致する並の巻が紫の上系と殆ど一致する本系の巻をふまえて作られた巻々であることが分るわけである。この並の巻というのが何のような理由で呼ばれるに至つたか、今は全く文献的證拠を失つてしまつた一箇の歴史的名称に外ならないが、それに全然關係されずに行われた武田氏の内部徴象による整理が殆ど完全にそれと一致するということは、並の巻という歴史的名称によつて平安朝期から呼ばれている一群の巻々が、後來の部分

に属することを最も強力に証明するものと言わなければならぬ。この二系統については、池田博士は「新講源氏物語」で、紫の上系を長篇的說話系列の單元、玉鬘系を短篇的說話系列の單元という風に呼び、和辻博士の説以來の考え方が、よく整理されながら、顔を出しているように思われる。しかし、玉上氏のように新しい態度に立つ人でありながら慎重な人もあり、三宅氏のように、はつきり否定する態度の人もあつて、猶この説は一般的承認という所に来てゐるわけではない。しかし紫の上系と玉鬘系、本系と並の巻との二つの分類法が期せずして九分九厘まで一致するということは、どの立場の人にとつても避けられない事実として提出されている公開の祕密である事は認めねばならぬ点であらう。

さて本系と並の巻という分け方と、紫の上系玉鬘系という分け方とは、九分九厘は一致するのであるけれども、源氏物語第一部全体にわたつて二箇所だけに喰ひ違ひが存している。そして、それもまた源氏物語の祕密をのぞかせている点として、ないがしろにすることは出来ないであらう。さて、その一つは、本系並の巻という場合には、帯木と玉鬘とは本系の巻のそれぞれ第二巻と第十七巻に當つてゐるが、紫の上系玉鬘系の分け方に従えば、ともに玉鬘系の巻に属していることである。そして内部徴證的に言えば玉鬘系であることが明白なのであるから、性質的に言えば、この二巻は本系の巻であるよりは並の巻であるとする方が適當であることは確かである。それにも拘らず、この二巻が歴史的には並の巻とされないで、本系の巻に加えられることは何ういう事情を語るものなのであらうか。この喰ひ違ひは源氏物語の、特に問題のある第一部の、成立に関する祕密の一端を暗示しているものと推測されたのである。勿論それは些細な問題であり、大袈裟にとり上げるべき問題ではなく、ことにはじめて並の巻というものの見える伊行の「源氏釋」がすでに平安末期のものであるから、信じるに足らない、とする立場も十分にあり得るわけで、その立場からするならば、問題とするに足らぬ事と

なるかも知れない。事実「源氏釋」までの百数十年には、五十四卷の写本も残つておらず、並の卷の論もない。しかし、ないという事は事実として無かつた事の証拠にはならないばかりでなく、有つたかも知れぬことの否定の根拠にもならない。そのような資料状況の中では、紫の上系と玉鬘系というような分類と、本系と並の卷というような分類との極めて近い相似ということは、立派に一つの問題となると思われる。そのようにして、それは、武田氏の報告に補強されて再整理された私の成立論の緒といふべきものとなるわけである。

それで、私の試論が現在までに到達した所を概略描いて置く必要があるが、それは大体次のようなものである。それによれば本系の卷々が先に出来て、並の卷が後に出来た上に、今一つ、本系の卷の第二卷に當るものと第十七卷に當るものとの二つの場所に何らかの理由で穴があいて、その穴埋めをするために、何らかの理由で本来並の卷であつた帚木の卷と玉鬘の卷とが本系の卷の序列に移されたのである。それで玉鬘の卷の問題は、卷の解釋の問題としても尙一定しにくい問題があると思われるが、帚木の卷の方はあらかじめ問題が解決していて、内部徴証の面からいつて、当然次ぎの空蟬・夕顔と共に三巻ひとしく並の卷であり、この三巻に対して欠逸した本系の卷Xがあつた、——その名は何うでもいいわけだが、歴史的にはそれに當ると推定できる「耀く日の宮」という名が文獻的に残つている唯一の名である。——というように見られるものである。さて並の卷といふことの意味は「河海抄」的解釋にしたがえば、極めて明白で、時間的に同じ場所にありながら、別系の物語として平行している卷といふことである。中世の源氏学に於ては伝説を附会して解釋したり、縦の並横の並といふことがあるといつたりして、幾分煩瑣な議論になつていたので、江戸期の国学者から「こちたき業」として必要以上に黙殺される結果も惹き起した。しかしそうした議論の輪廓は、玉上氏が「源氏物語成立攷」の中で、丁寧になどりながら、数

百年ぶりにまた学界の注意を呼び起されたのであるが、縦の並横の並などという議論の如何に拘らず、並の卷といふのは、その性質から言つて同一時間内に於て、共通に源氏を主人公としながら、並行して別系の物語として構想された卷々といふことと解釋して何の不都合もないことであつて、帰納的に見ていつて、並の卷の性質、したがつてその語の意味は殆ど曖昧な点を残さないものである。所である時期に於て、並の卷は本系の卷の一つに納まぜられた。当時の読者は、源氏の本伝は別にあつて、外伝としての並の卷の一とくさがりがまた別にある、といった風になつていても、読むに事欠かなかつたのだと思う。そういう読み方の出来た読者であつた。これは玉上氏も強く主張しようとしていた所である。それが別々であつたらよかつたのであるが、それが一つの源氏物語に結び合わされたので、そこで卷々のつゞき方が單純でなくなり、筋のつながりが錯雜するようになつてしまつた。それで、帚木の卷と玉鬘の卷とを並の卷のものとして除外して、本系の卷々を読みつゞけて行くという方法を取つて見ると、そこで大体一貫した長篇物語としての構想、したがつて卷々にわたる筋の展開や、卷々ごとの続き工合は非常に自然になることが分るのである。そうして掘みえた本系の物語の構成を背景に置いて、帚木の卷と玉鬘の卷とを並の卷のものとしてそれに加えた上で、並の卷を読み通して行くと、それはそれで、本系の卷を常に意識しつつ、美事にまとめられたものであることがはつきりして来るのである。それであるから、源氏物語の成立を追及しようとする場合、先ず本系と並とに卷々を区別する必要があるが、——この区別は源氏を鑑賞するのに必要な手段といふのではなくて、現代の作品とはちがつた現形源氏物語をそれとして読むために知つて置くべき非常に多くの条件の一つを明晰な意識のもとにうつし出して置くこととする為のものに外ならない。このように分析することは源氏物語の現形の成立を考えることであつていきなり鑑賞することの手段ではない。さてその次ぎに、なぜ玉鬘系の

性質を持つてゐる二つの巻が本系に属するものとして扱われるようになったか、又はそうなるための因として、本系のその部分では何故欠巻が生じたと考えられるか、それらの問題がいよいよ当面の問題として出て来るわけである。それは恐らく、本系と並のとりあげた主題に相違がある為に、たゞ機械的に結びつけたのでは、統一のある作品に成りかねるので、出来るだけ完全なものにするために行われた救済策であつたらしく思われる。しかし源氏という同一主人公を立ててはいても、両者の間には作品としての主題に微妙な相違が存しているの、一箇の作品として完全に融合させ切れることは事実上不可能であつたわけである。そのさせ切れなかつた事実が、作品の特に第一部のあらゆる面に残らざるを得なかつたのであつて、それは単に巻々のつき具合というような、外形的な点だけにとどまるものではないが、先づ眼につき易い点だけに添つて見てきても、それは十分に跡着けることの出来る問題であつたわけである。しかし源氏物語第一部全体の成立を今一步進めて考えるには、本系の巻と並の巻の結びつけは何故されなければならなかつたか、又主題の相違が認められるとするならば、どのように相違しているか、そして、その如く主題の相違した巻々を結びつけるには何のような手数を要したか、そういうような点が外形的な点だけでなく、作品の内面的な問題として、もつと大切な問題となつてくる。「源氏物語」の成立に関する試論の第一回第二回から第三回にかけて、丁度そのような問題の入口の所まで来ていたわけであつた。

〔註〕

(一) 四辻善成の「河海抄」巻二、巻ノ事、並ノ事の条に、「凡此物語の並の様一個に同時の事とも見えず、横堅ある歟、同つゝきの事を分てると見ゆる並もあり、是を並の並といふべきにや、今の空蟬の巻これなり、……玉螢の並は横堅相交れり、末摘花・関屋・蓬生は一向に横の並也……凡なびらの本意は横の義たるべきなり」とある。この考は、並の巻の本義は横の並にあるとした点にあ

る。即ち本系の巻に対して時間的に同じ時の事を並べ書いたのが本意であると見ているのである。しかし源氏全体としてはそうした並の巻ばかりでなく、本系の「帯木」に対して、時間的に並行するのではなく、その後続く「空蟬」がやはり並の巻となつてゐる。こういうのは本来的な並の巻と區別して並の並といふべきだと言つてゐる。善成の考は、あくまで並の巻は時間的に同時の事を書いた巻、即ち横の並の巻が本来的なものだと思つてゐる。形式的に同等の重さで横の二義ありなどと言ふのは全く別である。それにも拘らず自信なげに「並の横一個に同時の事とも見えず、横堅ある歟」などと言つてゐるのを見ると、善成以前から横堅の二義などという説があつた事が知れ、善成はそれに対して並の巻は横の並が本来的なるものであるべきと考えたのである。かく考えたのは、既に並の巻の意義が不明になつてゐた所から、それを明白にしようとした欲求であつた。鎌倉中期の「弘安源氏論義」ですでに並の意味は分らなくなつてゐるし、鎌倉初期藤原定家の「奥入」まで溯ても、やはり本来の意味はすでに忘れられていた事が感じられる。「源氏物語」の成立に関する試論「国語国文・昭和二十六年四月号参看」。だから中世に於ては並の巻はやかましい問題だつたのである。

(2) 近世の國學者では、賀茂真淵は「新釈」に「かかる事（並の巻の論）にいと心をつけずとも本末をよく説みとく時はおのづから知らるゝ也。今の人はかく様の事にのみ目をくらまして、文の意をよく説みとかねなるべし」と言い、本居宣長は「玉の小櫛」巻二に「並の事さしも用なき事なれど、むかしよりさだある事なれば一わたり心得べし」と言い、萩原広道は「評釈」に「古くいひ馴きつるに隨ひて今はこれを改めず、おして並の巻といひてあるべし。さるはさしも本文の意にあづかる事にもあらざれば也」と言つてゐる。並の巻の本義が不明になつた為、中世の源氏学で繁瑣な論がくり返されたので、江戸の國學者は中世の論議に価値否定を行つた時、並の巻という事自身をも輕視してしまつたのである。源氏物語三十七卷並の卷十七卷という数え方は、伊行の「源氏釈」「定家の「奥入」」「無名草子」」「紫明抄」「原中最秘抄」「河海抄」」「花鳥餘情」」「拾芥抄」等、すべて採用しているが、國學者がこれから迅速になつた為、源氏五十四巻という数え方しか行われなくなり、明治以後も最近

まで全く問題にされずに来たのである。

(3) 玉上琢彌氏「源語成立攷」の中並の巻の論(『国語国文』昭和十五年四月号・「源氏物語構想論」に収載)。

(4) 寺本直彦氏「並の巻の構想論的意義」(『東大源氏物語研究会「源氏物語講座」上巻・昭和二十四年)。

(5) 武田宗俊氏「源氏物語最初の形態」(『文学』昭和二十五年六月・七月号)、「源氏物語最初の形態再論」(『文学』昭和二十七年一月号)、共に「源氏物語の研究」(昭和二十九年刊)に収載。

(6) 玉上琢彌氏「源氏物語の構成」(『文学』昭和二十七年六月号)は、武田氏や私やのような成立論と思われるものに対して慎重の態度を取っておられるが、その論の主導因の中に、当時の読者というものの実態が強く計量されているように思う。そして、私もそういういくつかのデータは皆な計算に入れて読みもし感受もし考えもして、その上で、理窟の上では粗枝大葉だけを辿っているつもりである。

三

第三回の試論の中心課題は外形的問題から転じて内面的な方面に移りかけていた。それは第一部本系の巻の出発点に近いあたりの性質——最も早く作られたと推測される部分の性質——についてであつた。

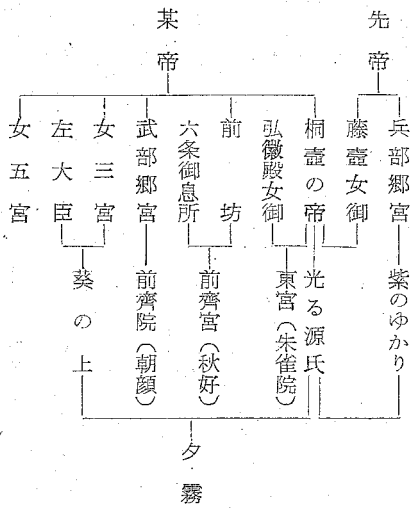
問題にとり上げた部分は、欠巻X(『耀く日の宮』と言つてもよい)・若紫・紅葉賀あたりを中心として、松風・薄雲・槿あたり及びまでの本系の巻々であつたが、特に欠巻Xの輪廓を復原することに努力して、源氏物語書き出しの頃の姿を、全体として掴もうとねらつたのであつた。その結果推定された欠巻X(『耀く日の宮』若紫・紅葉賀とつづくあたり)の源氏物語——これを原源氏物語と見るのも一つの見方である——は、現形源氏物語をそのまゝ巻を追つて漢と読んだ印象とは可成り違つたものを感じさせるものであることが分つてきた。特に注意すべきは、今は

本系の巻である帚木を含めた、並の巻帚木・空蟬・夕顔・末摘花の一群——即ち玉鬘系の前半——とはことに著しい作品としての違いを感じさせるものだということであつた。本系第一巻の桐壺はすでに種々の疑問を投げられていることは周知のことで、それは私の復元しようとした欠巻Xとは重複する所が出てきそうであるし、欠巻Xはなかつたものとする旧来の考え方の一つにしたがつて、若紫につづくとしても自然にはつづかないのであるから、それ自体として別箇に取り上げなければならぬ問題を持つてゐる巻である。それで桐壺に触れることは慎重に避けながら、欠巻X・若紫・紅葉賀とつづけて読んで行くと、そこにはつきりと個性を持つた物語の形態が析出できると思つたのである。

それは「古物語」と呼ばれてゐる源氏以前の物語の特徴をいくつか備えてゐる物語の形態がそこに在るということである。それを発掘の手順にしたがつて一々触れてゐる暇はないので結果だけを描き出せば、こうである。

源氏はある帝の最愛の皇子であつたが、なくなつた母と生きうつしの新后をしたつてゐる。母方の背景がないので、別の后に生れた兄の第一皇子が東宮となり、源氏は臣籍に下ることになつて、帝の妹宮の夫である左大臣がその婿を迎えることになる。元服をすませて大人の扱いをうけるようになった源氏は、少年として新后の居間にも自由に入入りして親しく睦めていた日から、はつきり袂別しなければならなくなる。そこで、なき母によく似た后を母そのものとして慕つていたつもの擬態的心理は、急激に隔てられた切ない片おもひ的な恋愛に生長する。そして父帝に対する思ひぬ秘密の關係が作られる。それから、后(藤壺)も意識して源氏を警戒する。源氏は藤壺との間に関のあること、また何よりも藤壺の自分に対する愛情の程を信じ切れない。その心は全く不安定な、自分でコントロールできない十代の思ひつめた恋ごころである。そして藤壺の兄宮の庶子である十歳ばかりの美少女を見つけたして、藤壺

の血つづき（紫のゆかり）であることを知ると、身代りにして、理想通りの愛人に育て上げようとする。しかし祖母は少女があまり幼いので、源氏の切望を真にうけない。一方藤壺は体の工合がわるくて里に帰る。源氏は気狂のように宮のあとを追つて、夢のような出来ごとがまた生じてしまう。藤壺はあさましい思出を二度とくりかえすまいと思つていたのに、今度は懷孕のことがはつきりしてくるので、そのなやみは大きい。火のつくような源氏の手紙にたまさかあつた返事もばつたり切れてしまふ。源氏の心はやゝ常軌を逸してくる。紫の少女の祖母が亡くなつた後の宿に乗り込んで、この紫のゆかり（藤壺の縁者）をさらつて来てしまふ。やがて玉の皇子が生れる。表面はあくまで帝の皇子で源氏の弟である。藤壺の宮も源氏も、父帝に対する怖れと罪とを感じる。宮は母性の愛情によつてその皇子の身の上を護ろうとし、いよく源氏に対して隔てを置こうとする。それが一層源氏の情愛をあきらめ切れないものになり立てて行く。その中藤壺は立后のことが決定したので、中宮になれば及びもつかぬ間柄になることと源氏はいても立つてもいらなくなつて行くのであつた。



これが源氏物語の書き出しから紅葉の賀までの主たる筋である。その外に源氏に關係のある女性を見ると、正妻左大臣の娘（葵の上）、従兄妹の朝顔の宮、父帝の弟前坊（故東宮）の妃（六条の御息所）などがあるが、その他恋愛關係ではなくとも一系の物語に登場してくる人々の系譜關係を示すとそれが大体皇室關係のものであることが分る。

系図にまとめると上のようになるが、先帝と某帝との系譜關係は全く分らない。しかし平安朝の歴史に照らせば、兄弟とか従兄弟とか位の關係であつたのではなからうか。とに角皇家族圈の中にあつたことは想像することが出来る。それはそれとして、書き出しの、いわゆる源氏物語に登場する主要人物は、すべて源氏の父帝（桐壺帝）又は先帝を中心にして、一等親二等親三等親の血族であるか、その婚姻關係者であることが分る。それは登場人物の点から見れば、決定的に「雲の上の物語」であり、「竹の園生の物語」であり、「皇皇家族圈の物語」であつたといふことになる。この特色は源氏物語の出発点に於て、特に十代の源氏が描かれていると信ぜられる限界の中に於て、——紅葉賀までの所では源氏の年齢は明白でないが、作品がなお發展しはじめ、特に若菜の巻まで進展する頃になると、源氏の年齢は紅葉賀あたりではまだ二十歳になつていなかつたものとして意識的に扱われている、——ある特殊の意味を持つものと思われる。しかしそれはそれとして、この皇皇家族圈の登場人物の中でも、最重要なのは藤壺女御である。一般に紫の少女（後の紫の上）は源氏一生の理想の女性といふことに見られているし、現形源氏物語の全般から見れば、たしかにそう見らるべき存在であるが、紅葉賀あたりまでの紫の上は、あくまで藤壺宮の身代りであり、源氏の感情は常に藤壺宮との關係に於て一張一弛していることがあまりにも明白である。現在の第一巻桐壺は既に触れたように、後來の巻かとの疑があるので、今は直接これを論拠にしたくないが、その中に「……にははしさは譬へむ方なく美しげなるを、世の人光君と聞ゆ。藤壺ならび給ひ

て、御おぼえもとどりのなれば、かゞやく日の宮と聞ゆ」という一節があつて、二人を並びたゞえてゐる。この光るとかかゞやくとかは、古代日本において、驚異に値する最高度の感性的印象をあらわす。目も眩むばかりとか、じつと見つめる事もできぬ程とか、まばゆいばかりとかいう言い方には同じ系統の表現が残つてゐると思われるが、何か圧倒する力をもつた、全身に打つてくる、殊に肉体的な魅力が發散する美しさであるようだから、たとえ桐壺の巻の作られた時期を決定し得なくても、源氏物語の制作の過程に於て、源氏と藤壺とが双璧として意識されてゐたことは認められるのである。

そのように、源氏にとつて、^う源氏物語時代には藤壺が最重要な女性として布置されてゐるとすると、この源氏と藤壺との關係が何のよう処理されていつてゐるか、それは出発点に於ける主題の解決の仕方として注意しなければならぬ問題だといふことが考えられるであらう。それで、藤壺と源氏とのその後の關係の發展を追跡していつて見ると、そこに一つの特異な性質を感じさせる点がはつきり見えてくるように思う。紅葉賀以後の藤壺と源氏とを軸にした物語と展開は大体次ぎのようである。

藤壺は中宮に昇るが、帝(桐壺帝)の讓位によつて、いかめしい宮中の生活を離れ、共に仙洞御所のくつろいだ水入らずの生活をはじめられたので、源氏はかへつて近よる時が少なくなる。やがて上皇(桐壺帝)の崩御によつて、中宮(藤壺)は源氏にも内密に髪を切られる(薄雲女院と呼ばれる)。源氏にしても甲斐のない嘆きに暮れるが、引きもどす由もない。

源氏の兄の朱雀院の朝廷ではその母后の弘徽殿女御と母后の父の右大臣との側に権力が移つて、左大臣も官を辞するし、それまでに、左大臣の女の正妻葵の上も男の子の夕霧を生んで死んでしまふ。その上源氏は弘徽殿女御にくまれて、京都での立場は頗るむづかしくなり、ついに

都を逃れて須磨明石に流浪する。その中に三年の時が過ぎて、天麥地異もしきりに起り、弘徽殿母后や朱雀院もしきりに病に犯されるというよくな有様なので、天下の大赦が行われて、源氏は都に呼び還されることになる。今は皇太后の薄雲女院のもとに歸つては来たものの、尼君の女院は、一層自由に近よりたい。しかし十代の恋は今や三十代を迎えて、かえつて多くの思い出に彩どられながら、断ちがたいものになりまざるのであつた。その中で、かりそめの病がもとで、終に歸らぬ人となりはてるのである。源氏の悲嘆はとり返すべくもないという所で薄雲の巻は終つてゐるのである。

以上が光る君と耀く日の宮を軸とした古い物語の展開と終結とである。この物語を皇室家族圈の物語たらしめてゐる数々の女性もこの頃までに自然にその半生の結末に達する。第一に正妻となつた葵の上は、源氏の父帝(桐壺)の妹内親王が左大臣に降嫁して生れた長女だが、葵の巻で夕霧を生んで死ぬ。その死因には、前東宮妃の六条御息所の怨念が祟つたためという疑が濃かつたのだが、そのもととは源氏にもあつたことに作者は書いてゐる。年上であつた御息所を手に入れるまでは火のようになつてゐた若い源氏が、一度ゆるした御息所に対して急に熱がさめていつたので、その誇を傷つけられた女性の嫉妬を抑さえることができなかった。爆発したものであるらしかつた。前東宮妃を軽くあつかつてはならぬと父帝からも特に訓戒のあつた源氏の態度は、御息所の誇のたかい性格と触れあつて、事件の原因を作つたわけであるが、あまり愛していなかつた、矢張り誇りがちな葵の上も、死なれて見ると源氏の気持はその方に片寄つて、六条御息所をうとましく思う氣持がたかまつてきた。丁度その頃御代がわりで伊勢齋宮の更迭があり、前東宮の王女がそれに當つたので、生母御息所は、源氏の氣持を敏感に察し、王女につき添つて伊勢に下つてしまふ。そして源氏も間もなく都を離れるのだが、源氏帰還の後、朱雀院は病によつて讓位、末弟の冷泉院(実は藤壺女御と源氏との

間の祕密の子」が即位する。この御代がわりで再び伊勢齋宮の更迭があつて、六条御息所は王女につき添つて帰京するが、間もなく王女が行く末を源氏に託して静かに世を去つて行く。こうして第二の女性にも終焉が来た。この王女はその後間もなく冷泉院の後となつて秋好中宮とよばれるが、親代りとなつた源氏の所を里として、その邸宅に花を添えたのである。第三には従兄妹の朝顔の宮である。桐壺帝の崩御の時、その第三内親王が賀茂の齋院であつたが、大喪のために聖職を退き、朝顔の宮が齋院に代つた。元来この王女は源氏が十代の頃から朝顔の花につけて恋の文など送つた人で、従兄妹同志の近い仲だが、女の方はまことに自然で、特に源氏に熱するわけでもない。六条御息所は朝顔にとつても義理の伯母であるから、その身の上についてのうわさは聞えてくる。そして自分は決してあんな風にはなるまいと深く思いこんでいるので、恋文の返事もしない。賀茂齋院の御禊の日の行列を父親王と棧敷から見物した折も、列に加わつた近衛大将の束帯に身を飾つた源氏のまばゆいばかりに美しさの増して行く容貌を、これ程まで美しい人が、何うして普通の男とちがつて幼い時から衰らず文をよこすのかと、心が傾いたが、体を自由にまかせようとまでは考えてもみなかつた。そのゆとりのある近親の女性の態度は源氏をいつも牽引している。齋院になつて、聖処女としての立場に立つても、源氏の心は朝顔を忘れない。紫野の雲林院などに泊ると、程遠くない齋院御所にそれとない文を送つたりして、冒瀆の想にそつと胸を揺がすこともある。朝顔の齋院は可成りながくつづいたが、藤壺女御（薄雲女院）の崩御に引きつづいての父親王の薨去によつて、喪に服するため退いた。源氏は勿論三十代にふみ込んだ時で、朝顔もすでに老嬢である。第五内親王（源氏の叔母）の同居している桃園の宮に移つたので、源氏はしばしば叔母宮の所に訪れてゆくようになる。女五宮も源氏の気持は知つていたので、二人の仲を結びたいと思ふ。しかし朝顔はまことに淡々として、こともなく二人の仲は遠のいて

行つたということになつてゐる。

そのようにして、藤壺女御が現身をそなえた源氏の手のとどかない世界に去つてしまふ頃、幼い源氏をとりまいていた重要な女性たち、それもみな「雲の上」の世界を構成していた女性たちは、殆どすべて源氏の周囲を離れ去り、あとに残つたのは、藤壺女御の身よりの人（紫のゆかり）、藤壺の身代りに源氏が拐つて来てしまつた姫君ただ一人に外ならなかつた。源氏と紫のゆかりとの夫婦の仲は、誰が正式の仲人となつたのでもなかつたが、互に相許しあつていて、源氏にとつて欠けてはならぬ理想の女性であつた。しかし物語作者自身は、紫のゆかりについては非常に慎重な扱い方をしているのであつて、常に君とか姫君とか紫の君とかとよんでおるが、正妻葵の上の死後、「上」と名のつく人は決して登場させていない。そして、専ら遠去かうとする藤壺への思慕を軸として筋を展開させている。そして薄雲女院崩御のあたりから、漸くはじめて姫君であり女姫であつた紫が「上」として語られるようになって行くのである。

源氏物語第一部の本系の巻々のうちで、物語の書き出しから半ばに及ぶ筋は大体以上のようなものになるであらう。もしこの筋を大過のないものとするならば、それは耀く日の宮と光源氏との恋を主軸とする物語であるに外ならぬこととなる。そして後の紫の上はあくまで藤壺の身代りに過ぎないのである。少女時代の紫の上を見つける「若紫」の巻では、耀く日の宮は既にはつきりと藤壺の宮として出ているに對して、少女の身の上は宮の姪に當ることがはつきりしてから「むさし野といへばかこたれぬと紫の紙に書いたまへる墨つき」といつた句が出てくるが、これは、

知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫の故
という歌によつたもので、つまり姫君を紫の「ゆかり」と見ているのだが、それは、藤壺の藤の紫に懸けたものであり、直ぐ先に進むと更にそ

の紫を藤の花の色としてでなく、紫草のこととして扱っているが、その場合もやはり藤壺のことに見立てていることは同じである。藤壺の姪の少女を何時手に入れ得るかと憧れ心を詠んだ歌は、

手につみていつしかも見む紫の根にかよひける野辺の若草

という表現を取り、藤壺のゆかりの少女をゆかしく思っているという歌は、

ねは見ねどあはれとぞおもふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを

という表現を取る。それ等はすべて藤壺の宮が主であつて、後の紫の上は常に従となつていることを示すものである。「若紫」という巻の名自体が、主となる紫に対して若い紫と名指しているのであつて、これは勿論「伊勢物語」巻頭の初冠した男が春日の里の女をかいま見た歌

春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れ限りしられず

によつたことは先哲の見解の通りであらうが、「更級日記」によれば「紫のゆかり」と呼ばれる巻があつたこともはつきり分つてゐる。それは即ち「若紫」の巻に外ならなかつたと解釋されて来ているようでもあるが、「紫のゆかり」の方が、この巻の本来の藤壺宮を主にしてそのゆかりの人を見つけるという性質にはふさわしいのではないかとも思われる。今日では「紫」という場合にすぐ後の紫の上だけを連想しがちであるけれども、源氏物語が書きはじめられた頃の主題は決して源氏と幼い紫のゆかりとの物語ではなくて、寧ろはつきりと父帝の後継く日の宮に對する幼な源氏の恋慕の物語であつたことが分るのである。その耀く日の宮がこの世を去ることによつて、この主題は一応完結すると共に、そのゆかりの者である若紫（紫の姫君・紫の君・姫君）が紫の上となるのであつて、その段階に於ては、物語は自ずから新しい段階に進展しはじめて行つてゐることになる。しかしその問題は章を新しくして考えなければならぬので、ここで直接触れることはこれ以上ひかえたいのであるが、唯要点だけを摘出すれば、三十代の源氏の物語は、この紫の上と

並ぶ明石の上の出現によつて特色着けられていて、平安中期の一夫多妻主義社会の安定した私生活を、ゆたかに大河の流れるように悠々と繰りひろげて行くのであつて、榮華の極みにある権力者を軸とした風俗繪巻といつてよい。

しかしそうした物語の主題の変化は、少青年期の源氏と壮年期の源氏との違いから自然に來たものであつて、決して構想を別箇に立てて出發し直したために、生じたことではないということも出来るかも知れないが、しかし、その見方は窮極に於いて無理を生じてくる感じが感ぜられるのであつて、矢張り第一部の書き出しと、その中心部とでは、主題は意識的にずらされている、構想そのものに發展があると見る方が作品に即した見方であつて、無理がないのではないかと考えられる。そのことを次に考へて行きたいのであるが、ここまでの所を取りまとめ、今まで問題にして來た第一部本系の出発点の部分は、その軸となる筋の構造からいつて、「紫と紫のゆかりの物語」とでも名付けることが出来るであらう。

〔註〕

(一) しかしまた全く別の考もありうる。玉上塚彌氏は「源氏物語の構成」(「文学」昭和七年一月号)で、この「耀く日の宮」は古物語であり、源氏物語の中の一帳としては書かれなかつたものであるとの假説を展開しておられる。したがつて帶木・空蟬・夕顔の巻々に対する本系はなかつたと考えられるものようである。その理由は二つ。一つは、本系として「耀く日の宮」があつた場合、当然書かれてあるべきものは非常に多く、源氏物語中の一巻としては盛りえないということ。今一つは帶木・空蟬・夕顔は「光源氏外伝」であるが、正伝なき外伝を当時の読者はよく心得ていた、その理由はつまり描れざる部分を滞りなく理解し得たからだということ。その立場からは、桐壺と若紫との間に「耀く日の宮」がかりにあつたとしても、それは源氏作者の筆でなく、古物語だつたということになりそうである。それは別の古物語であつて原源氏物語で

はあり得まい。これを原源氏物語と見るには、「源氏外伝」(私も試論の第一回で並の巻々を外伝として考えた)としての並の巻帯木・空蟬・夕顔などが書かれた時には、本系としての巻が存していたが、この本系の巻と外伝の巻とを、現形のように一本にまとめてから、その本系の巻はなくなつて、「桐壺」に書きかえられたという経路が考えられねばなるまい。これは決して創作過程の問題ではない。あくまで現形の成立過程の問題である。源氏発端の近くの扱い方だけで研究者は、非常に相異つた立場から出発しうる事が明白である。私の対象は極めてせまい成立過程の問題である。いきなり創作過程の問題や鑑賞の問題やに焦点が移ると、兎角現形源氏物語の擁護論になる傾きがあるようだ。成立論の目的は現形源氏物語の否定論では決しないのだという点は間違なく理解されていなければならない。成立過程の論は現形の定着するまでの経路の出来るだけ冷静な追跡である。(森岡常夫氏のように成立論は芸術研究として無用な仕事だとされるらしい立場もあるが、そうした立場は勿論可能である。しかしそうだからといつて、この研究を否定しうる権利をその立場は持つていない。)武田氏や私のような素朴な段階の成立論に疑問を持たれる多くの成立論者は仲々多い。玉上氏も亡き折口信夫博士も高崎正秀博士もみな成立論と慎重に取り組んでおられる学者であらう。

四

「紫と紫のゆかりの物語」と仮りに呼ぶこととした部分の主題は、ひたすらな恋慕の対象が、そのひたむきな気持にも拘らず、手の及ばぬ世界に消え去つて行くという事である。これは物語の骨組としてはまことに簡単なものに属しているということが出来る。しかしそのような主題の設定そのものは決して単純なものでもないし、物語發展史の上で無意味なものでもない。その事だけを問題として、専一の研究の形では取り上げられていないにしても、昭和期三十年の間には多くの先学達によつて折りに触れて屢々言及されている点であるから繰り返すまでもない

ことではあるが、物語發展史を考える上では非常に注目すべきデータの一つであるように思われる。

この主題の特色は、男が何うしても女を捕え得ないということにある。男はもとより遊びでなく、一徹に思いつめている。それなのに女の心は根本的に逃れようとする方向を堅持している。こうした主題は源氏物語に突如として生じたものでなく、可成り長い歴史を持つていて、その涯は縹渺として太古の霞の彼方に消えているということである。

勿論平安朝中期の後宮や京都貴族の後室の世界に於てこのような主題がよるこばれたについては、当時の上流社会の女性の社会的位置から来た心理的狀況が大きく因をなしていたに違いない。そしてその上、それは著しく時代的な潤色をうけていることも見逃せない。しかしそうした点を出るだけ払拭して、その骨組だけを洗い出して見ると、非常に古い主題であることを認めなければならないであらう。

先ず第一に源氏物語より少し前に書かれたと信ぜられている宇津保物語でも、この主題は重要な地位を占めている。勿論宇津保物語は成立上に錯雑した事情を持つていて、その上中世にわたるらしい長い生長の過程を有しているらしいから、現在見得る形態は、全体としていえば成功しそこねたものといふべきであるかも知れず、何よりも眼につく点は、いくつかの説話群がそれぞれにずれた土俵の上で成立していて、一箇の作品としての統一性を欠いているということである。だから今問題にしている主題についても、主にも、「藤原の君」あたりにはじまる物語で、青年貴公子たちの憧憬の眼にとりかこまれた大臣の娘の貴宮が、彼等の傾倒している心情をあつさりふり切つて、東宮妃となり、宮中に入つてしまふという所だけに見られるわけであるが、それは宇津保物語全体としては一つの部分に過ぎないとしても、それでまとまりを持つた相当の大きさのある物語であることは間違いがなく、もしその部分だけが独立して伝わり得たと仮定するならば、やはり相当の中篇ということが出来る

るであろう。その貴宮とそれを囲む貴公子たちとの物語が、まぎれもなく同じ主題であることは注意してよいことであろう。

今少し遡つて竹取物語まで行けば、これは緊密な構成を持つ一篇全体が問題の主題を扱っている作品であることが殊に顯著である。それは誰もが知る通り竹取の翁が見つけた赫耶姫に五人の雅び男（色好み）がいでみ合つて、何れも失敗した後、翁や姫の悲しみをよそに、宮中に迎えようとする帝をも地上にのこしたまま、月世界に昇つてしまふという物語である。その竹取物語は宇津保物語とともに、源氏物語の繪合の巻に「物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁に、宇津保の俊蔭をあはせて争ふ」とあるように、繪巻物の優劣を争うにも、組み合せるにふさわしい作品と見られている上に、殊に竹取物語は「物語のいで来はじめの祖」といわれているように、限定つきにはあるが、古いことの証明書のある作品でもある。これについては、仮名書きの物語として創作された作品の中、少くも源氏物語の時代に最古のものとして一般に信ぜられていたのであろう事、そしてそれも古伝承をもとにしながら、民譚そのままの採集ではなしに、創作意識によつてまとめ上げられている事、以上の二点を計算に入れて「物語の出で来はじめの祖」と見るべきだとする見方が大体現在の通説である、ということになるかと思うが、この現在の常識にしたがえば、竹取物語にはじまり、宇津保をも含めた多くの物語は、大体源氏物語の螢の巻にいう所の「世の古ること」という部類に属するものとなるようである。「世の古ること」の意味する時代的下限は決め手がないが、恐らく源氏物語の作者は、自分の創作に對置させた場合、単に時代的に古いというだけでなく、何等かの意味に於て、作品としての質的な相違を意識していたように思われる。「世のふるごと」が創作物語をさしていることは、螢の巻の言葉でもはつきりしているから、それは「物語の出で来はじめの祖」なる竹取物語あたりから以後、源氏物語以前の物語を一般にさしているとして見て、ひどく的をはずれることはな

いであろう。そう見る場合、竹取物語、宇津保物語等に於ると同じ系統の主題によつて、源氏物語のはじめの方がまとめられたということは、ある意味を持つてくると思われる。それは源氏物語の作者が、その出發當時には、螢の巻あたりを書くようになっていつた頃の作者——それが同一の作者であろうとも、そうでなかつても——のうちに、従来の物語を「世のふるごと」などいい切れるような立場をまだ成立させていなかったことと關係すると思われるのである。それは結局、先に名付けた「紫と紫のゆかりの物語」の主題が、いくつかの古い物語のそれと同一系統に属しているという眼で見ると、赫耶姫、貴宮、耀く日の宮、といった女主人公の名前の共通性も、無視することの出来ない特徴を示すものとして記憶すべきものになつて来るように思うのである。その名前は期せずして、何か同一の系統に属するような感じを与えるであろう。勿論その一つ一つを切りはなして見れば、歴史上にも出て来る実在の人の名前でもあつて、とびはなれて架空的であるとか伝奇的であるとかといふ切ることとは出来ないものであるが、それにも拘らず、この一系の物語に於て、いずれも男性の慕情に動かされずに下界の男性の手の及ばぬ所に消えて行くという共通の性質を持つた女性が、すべて高貴とか目もまばゆいとかいう意味の名を持つてゐることは、ある共通の意味を現すものと見る事ができるかも知れない。寧ろ共通の意味を持つてゐると見るべきものである。それは飛躍的に話を進めるならば、ある神聖さである。神聖というのがある特種の意味を示すおそれがあるとするならば、地上的でないものである。天上的なものである。

勿論、「紫と紫のゆかりの物語」に於ける耀く日の宮は藤壺の女御であり、先帝の内親王であり、源氏の父帝の后に立つ人であつて、はじめから雲の上の世界での存在であるが、それ以外の点では、何の神怪不思議の性格も与えられていないばかりか、全く完全に人間としての理想の女性——若紫の巻の表現に従えば、「懐しうらうたげに、さりとて打解

けず、心深う恥かしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させ給はぬを、などが斜なることだに打交り給はざりけむと、つらうさへぞ思さる」といふような女性——として（勿論當時の最高階級に於ける理想的女性として）描かれてゐるのだが、そして、やはり源氏も理想的男性（當時の理想型男性は必ず雅び男でなければならぬが、その点源氏は理想的な色好みとして描かれている）であるのだが、それにも拘らず、藤壺の宮のために源氏が尽きぬ嘆きをしなければならぬという点にこそ、宮がただ者でない痕跡が残されている。それは宮その人の個性とか性格とかいふ問題ではない。当事者同志の意志を越えたものとして受け取られねばならぬ原因によつて決められて来ているものである。それは具体的な形としては、父帝の後であり、不義の關係に於いて結ばれているから、後は源氏から遠ざかうとして、しかも忘れることは出来ぬから悩むのであり、源氏は宮が自分を愛していると思ひながらも、信じ切れないで、かえつて一層の思慕の情をつのらせるという形に於いて描かれている。それは兩人の意志を越えたものであつて、當時の思想によつてそれは「宿世」として観念されている。この思想的背景によつて、藤壺は一見全く神怪性を払拭されたように見えるのであるが、宿世の縁によつて、一種の劫罰をうけつつ最愛の者同志が地上に於ては隔てられねばならぬという、運命的關係は純粹に人間だけのものではない。そこに藤壺の宮の不思議さが残る。つまり藤壺は至上命令によつて源氏から去つて行かねばならぬ者と決められてゐるのである。その点だけは宇津保物語に於ける貴宮も全く同じであるし、竹取物語の赫耶姫も少しも違ひはない。ただ赫耶姫となれば、はじめは指位の大きなので、鳥籠に入れて飼つたとか、天女であるが罪によつてしばらく地上に墜されたのであるとか、最後は死ぬのでも宮中に入るのでもなくて月世界に昇天するとかと、可成りはつきり急所ごとに説話の系譜が何であるかの証跡をのぞかせてゐる。特に籠に入れて飼つたといふような所には、柳田国男氏が説

かれたように、鳥の玉子から生れた伝承の旧態が顔を見せてゐる事も確かであろう。そこまでくれば耀く日の宮の祖先が異類であつたろうといふことだけは察するに難くないし、察してもひどいのはずれにもならぬであろう。鳥の姿をなして人間界に訪れるのは、この世ならぬ美しい天界の仙女であつた。だから時来れば人間界を去らねばならぬのである。

その竹取物語以前の、いわば民間伝承的形態にとどまつた伝説は、奈良時代の風土記にもいくつか採集されているし、竹取物語以後の時代に降つてもいくつか文献の上に定着せしめられてゐる。大正以後の時代以降つて、各府県の民譚集、昔話集が編集されるようになって分つたことは、各地方に民話として随分ひろくこの物語の系統のものが今になお分布してゐたといふことであつた。その記録として最も古いものの一つである近江国風土記の殘篇に幸に形を伝えた伊香の小江の伝承は、典型的な白鳥処女伝説の形態を保存していることが分るが、つまり耀く日の宮ののぼりつめた先祖は、白鳥の毛衣をつけて山嶺に近い紺碧の湖に舞い降つては、人なき水辺に衣をぬぎすてて、窈窕たる裸身を水に映しながら浴している天界の仙女白鳥処女であつたわけである。多くは五人の処女が舞い降るが、その羽衣の一つを人間におさえられて、仙女の一人が人間の妻になる。しかし夫の隠した羽衣をついに見つけて天界に去つてしまふといふのが最も單純なこの伝説の典型であるといふことができる。

もしこの見方が大過なければ、契沖阿闍梨がはじめて考えたように、竹取伝説は宝篋蘭經の説話の焼き直しと見るべきでもなく、また幸田露伴博士の指摘されたように月上女經の説話の變改でもなくて、やはり太古原始の時代に世界に分布して、遠東の日本列島の生活にまでも運び込まれた白鳥処女伝説が、この列島の中で生長變化したものに基いてゐると見た方が実情には近いようである。

「紫と紫のゆかりの物語」がそうした古伝説の主題と、したがつてそ

の構成とに呪縛されていた疑が、いささかでもあるとするならば、源氏物語の書き出しの頃の性質は、明らかに「世のふるごと」、古物語のそれに属していたと見ることが出来るであろう。それは中国古代小説史の通例にしたがえば伝奇というに最も近いと思われる。太古の小説、外ならぬ神怪異事の残片をもとにして、新たに興つた唐代の創作、すなわち唐代伝奇と性質上きわめて近いもののように見えるのである。

〔註〕

- (1) 松下大三郎博士「宇津保物語は鎌倉以後の偽作か」(『国学院雜誌』昭和元年 月号)・池田彌三郎氏「物語の成長—宇津保物語の場合—」(『慶應義塾大学文学部「芸文研究」第二号・昭和二八年二月号」)
- (2) 多屋頼俊博士「光源氏の宿世」(『国語国文』昭和一七年二月号) 後、「源氏物語の思想」(昭和二五年刊)に収載。多屋博士の論は、拙稿のような民俗学的な奥のする解釈とはちがうと思うが、宿世観は源氏物語では一つの重要な人生観として、他の先学達にもしばしば触れられている。
- (3) 柳田国男氏「物語と文学」。
- (4) 典型的なのは「近江風土記」の逸文に見えている伊香いかこの宿彌の出自を伝えた伊香の大江の白鳥伝説である。
- (5) 「今昔物語」本朝部、「海道記」、「碧山目録」等。

五

「紫と紫のゆかりの物語」が、古物語的発想をもつているとしても、それが非常に重要なものとして読者心理を惹きつけていたか何うか、それはよくわからない。特に光源氏と耀く日の宮の關係がどのように力を入れて語られていても、また二人の間の秘密の子の冷泉院がついに帝位にのぼるにしても、それはすべて人間の意志力によつて開拓されて行く問題ではなくて、すべて人間以上のさだめによつてゐるものとして、宿

世の縁として、超人間的な關係ということに押しつけられて行く。いつて見れば、この關係は歴史を切り開いて行く人間の契機としては捕えられていない。だから、常に光源氏にとつてはつきぬ嘆きであつたり恨みであつたりする。公人としては二十歳を越すまで帝の寵を一身にあつめて、その筋から通せば、どのような願いもかなえられぬことはなかつた存在であり、後半生には自ら最高の権力を握り、臣籍に下つていながら太上天皇に準ぜられた人間という風に扱われていながら、藤壺との關係は私人としての暗い闇にかくされていて、冷泉院懷孕の事件も、その夜の祈禱にあづかつた一老僧と、藤壺に侍した一女房の外は、誰にも知られない秘密として扱われている。それは光源氏の生活の谷間であつて光ではない。彼を人間の背後にある幽暗な世界——そこから逃れ出てくることによつて人間が一層人間となりえた、そういう背後の世界——であつて、そこへ引きもどそうとする運命のきずなを源氏の生活はたち切つていない。藤壺との關係によつて、源氏は半ば人間界ならぬ世界の理法につながれているわけである。その暗い宿世からは何物も生れては来ない。彼の生活が人間界で花を開くには、藤壺との關係に象徴的に表現されている幽暗な世界を否定的に乗り越せる契機が恵まれなくてはならない。それはもつと人間世界での關係の上に生れたものでなければならぬ筈であろう。ゆかりの少女、あとの紫の上はそのようなものとして持ち出されているようである。源氏発端に近い、藤壺のゆかりの少女の出現は、源氏を人間の世界に救い出すものとして配置されたといつていさなくはない。そこで、この古物語の発想に立つた「紫と紫のゆかりの物語」は、紫との關係が第一主題である所へ、紫のゆかりとの關係が第二主題となつて重なり合つて来ることによつて、危うく古物語の発想に終ることから逃がれる。そして二十代三十代の源氏の私生活を人の世の物語として展開させて行きうるきつかけを掴む。だから「紫のゆかり」ともいわれたらしい「若紫」の巻は、やはり「源氏物語の行きはじめの

祖」であり得るわけである。「耀く日の宮」という巻が名だけのことで少くとも藤原定家の時代には本来なかつた巻とされたにしても、また帚木・空蟬・夕顔の書かれた後に消えたとしても、そこでは藤壺とのことの発端が軸であつて、紫のゆかりの少女はまだ出て来ていない。その上登場すると想像される高貴な人々のいずれもは、葵の上も、六条御息所も、朝顔も、主軸になる藤壺と源氏との恋に対して、それを終結させながら発展させて行く者であることは出来ない。

一つには源氏の書き出しは皇室家族圏の物語であり、「雲の上」の物語である。しかし桐壺帝の近親圏内の人ばかりである。藤壺は同じ皇族でも桐壺帝の後であつて、先帝の近親圏内の人である。先帝と桐壺帝との関係はばかされていて知る由もない。そこで藤壺を乗り越しながらそれを生かして行くものは、物語的配置からいつて藤壺のゆかりの者でなくてはならぬ。その登場によつてのみ、源氏物語は安心して藤壺を神の世界に追いかえしながらも、源氏を現世に生き抜く物語として展開させて行くことを得たらしいのである。源氏は公人としても藤壺の亡きあとに榮華の花を開く。私人としても藤壺の亡きあとに幸福の現実生活をうち立てる。相手はゆかりの少女、紫の上である。だから「若紫」は、源氏物語を古物語的発想から救いたかなめの役をはたしているといわなければならぬ。その発想は非常に⁽¹⁾つよく伊勢物語にたよつてゐる。それは先学の論説の通りである。

我々は源氏物語の出發自体が、同じ古物語同志である竹取物語の伝奇的発想と伊勢物語の現実的発想との対立を何とか統一した所に根ざしていることを見出して驚ろかされる点が深いのである。その統一がつまりまた源氏物語を古物語からぬけ出させたものでもあつたらしいのである。次ぎはこの試論の第五回を記しうる機会に任せたい。

〔註〕

(1) 島津久基博士「源氏物語講話」(若紫)、玉上琢彌氏「源氏物語の構成」
〔文学〕昭和二十七年一月号。